

## 2026年度奨学生総評 暮田真名

今年度奨学生となった15名の作品には、大づかみにいえば青春詠・社会詠・見立て・無意識・定型意識など、いくつかの傾向が見られた。

青春詠といういいかたもどうかと思うが、青春詠と社会詠は自他の問題を扱うという点で地続きである。前者は手の届く距離にいる他者と自分の関係にスポットを当てる。「自分の他者性」にまで話が及ぶと、後述する「無意識」グループに接近する印象がある。後者は鳥瞰した視点で社会の中にある自分を見つめる。

「見立て」と「無意識」は逆向きの表現である。今年度の口語詩句賞を受賞された常田映子さんは、まさに「見立て」の作家だった。選考会では高い描写力が賞賛される一方で、ともすれば「見たいものを見る」ような恣意性に陥るのではないかという指摘がなされた。「無意識」に依るのはその反対で、世界のわからなさをわからないままに書くことができるが、そのぶん伝達性は落ちる。わたしは後者のやりかたに期待を寄せる者である。

ここからは、いままで挙げた順番に作品を見ていく。

幸せそうって  
あなたが言ってくれるから  
ポップな河童みたいに笑う／金光舞

着膨れて甘い匂いのおじいさん／同

藤の色をすみれの色で喩えては  
一人称がゆらいでばかり／川上真央

物言わずカフェが翳れば  
人びとは  
水仙のごと起きあがりゆく／同

金光舞さんの作品には、「なりたい」「生きたい」という願望の言葉がたびたび現れる。いまここにある自分のあり方、生き方に納得がいかず、なにか別のものに変身したいのだ。「ポップな河童」、「甘い匂いのおじいさん」というカオスには、現状を揺るがす兆しがあらわれているように見える。

川上真央さんの作品に頻出するのは「きみ」「あなた」という二人称で、ジャンルとしては「相聞歌」だと思う。「藤の色～」は身近な他者の視線を使って自らの輪郭を描こうとする不確かさをよく表している。「物言わず～」はたまたま同じカフェに居合わせただけの薄い関係の他者を書いているぶん、時間経過や空気感にピントが合っていて、この方向性を追究してもおもしろいのではないかと思う。

生存という名のキャリア  
猫じゃらし／大西美優

はつなつの性別欄に粹いくつ／同

勉強に明け暮れていた  
人だけが探せる花もあるよ  
馬より／マズルカ

「俺のため  
あるんじゃないんだ天国は」  
犬より安いシャンプーを買う／同

「生存という名のキャリア」は、一般的にはただ生きているだけでは「キャリア」にならないことを、「性別欄に枠」はセクシュアルマイノリティを無視する制度への告発を内包しており、重い。しかし、「猫じゃらし」や「はつなつ」「枠」「いくつ」のu音のリフレインは歌うように楽しげで、そこが大西美優さんのユニークなところである。

「馬」や「犬」といった人間社会の外にいる生き物を通して人間を見、人間のかなしみやおかしみを描こうとしている。マズルカさんの作品の中では、皮肉が前面に出すぎるものよりも、このように寓話的な読み味を持つものを好ましく思った。

立ち漕ぎに変える瞬間とんでゆく  
麦藁帽、ありがとう、麦藁帽／快名

受け売りの感情を曳く  
筆圧は  
なぞりがきドリルをさまよって／同

性欲をやめて  
ひかげに見つめれば  
ましろいサラダボウルのきみだ／さいう

シンクに訪れた  
漏斗のような百合を切るひと／森川紬

「受け売りの感情」と「なぞりがきドリル」の類似性。永田和宏が「問いと答えの合わせ鏡」と言ったところの、王道の書き方である。個人的には、風に飛んでいく麦藁帽のような歌に可能性を感じた。

昨年の口語詩句賞受賞者のさいうさんは、今年は神話など外国文学のモチーフが目をつけた。「ましろいサラダボウルのきみ」は不思議な表現だが、いわば内臓の容れものである人体に対して、葉野菜の器というのは、どこか人間離れした聖性を思わせるところがある。百合の形状を「漏斗」と見抜く力は見事。森川紬さんの作品には料理や台所に関する言葉が多く、たしかな手ざわりを感じた。この手ざわりを足場として、さらに独自の表現へと進んでいける作者だと思う。

百万の胡桃の雨をうけながら  
死因はなにか考えている／雲理そら

ふくらんだわかめにどんどのま  
れてく部屋からでなきや  
もう受け入れなきや／同

夢の中で蟻に噛まれた指先の  
あたりがずうっとかゆい もう昼／高田皓輔

ピーチティーふざけるのを  
いい加減にする／同

脳みそを分け入ってみる四畳半／青木菓子

モンブラン崩せば口は大聖堂／同

真昼間に茹で大根が透けていく  
また占いは少し当たって／彩燈琴璃

風のない眠りに胸は重湯なの／同

雲理そらさんの作品も、青春詠と呼ばれる領域をベースとしながら、しかし世界のわからなさを体当たりで受け止めているような印象を受けた。これからもわけのわからなさを大事にしてほしい。

高田皓輔さんは、短歌でも川柳でも存在感を發揮していた。特に最近の作品は、社内生活を送る上ではなかったことにされるような意識のブレを言葉にうつしとることを試みているようで、頼もしい。

「脳みそ」も「口」も、無理矢理に言ってしまうえば「内側」である。青木菓子さんの作品は、「内側」に光を当てることでかえってそのブラックボックス性を明らかにするようで、挑戦的。彩燈琴璃さんの作品のモチーフは全体的にオレンジがかってキラキラしており、キッチンである。その光が曇りガラスのようなもので一枚隔てられているときに、もっとも魅力を放つのではないか。

心臓が  
もち巾着のきゅっとなる  
なみだなみだの夜にございます／松下誠一

梅林にあなたいつまでそんなふう／同

恋人も小人も怠惰冬の水／上原一樹

溜息のように磯巾着あるく／同

川柳はセーヌ川発祥 だけどね／互井宇宙論

どうやって伝記にならず生き延びよう／同

竹林をのびちぢみして石鹼玉／ムクロジ

しゃっくりがおさまったので  
帰ります／同

松下誠一さん、上原一樹さんには、いつも川柳表現、俳句表現の可能性を見せてもらった（「心臓が～」の一首は短歌だが）。

「にございます」「あなたいつまでそんなふう」といったやや時代がかった言い回しが、松下さんの手にかかれば不思議なほどの「うっとり感」を帯びるのを、驚きながら見ていた。昨年の口語詩句賞の選考会では「時実新子的」と評したが、もはや独自の領域に足を踏み入れていると感じた。

上原さんの作品の魅力もまた、「うっとり感」かもしれない。磯巾着が歩いているのは海だろうし、「冬の水」も冷たいはずなのに、どこか眠りに落ちる前のような快さがあるのだ。

互井宇宙論さんの川柳には、本当は「柄井川柳」という人名がもとになっている「川柳」を「セーヌ川発祥」と嘯いてみせるような、権威へのおちょくりが見られる。その裏には個人の物語化への強い警戒があるのだろう。ぜひ、川柳を書きつづけてほしい。

ムクロジさんは、シャボン玉の「のびちぢみ」、「しゃっくり」など、妙に些細なことをキャッチするアンテナがあり、打率の高い俳句を発表しつづけていた。

一年間の作品の投稿、おつかれさまでした。

惜しくも漏れてしまった方々も含め、新年度もみなさんの作品を心待ちにしています。